



町民文芸

只見短歌会 令和六年三月詠草

また一人友逝くと聞く雨の朝さびしき暮る一人居の我は
馬場 八智

亡き友の生前言ひし励ましの言葉時折浮かびてくるも
関谷登美子

昨夜^{よべ}出向き診察終へて戻る道早も除雪車と数多行き交ふ
目黒 富子

息子^こが遊び散らかるおもちや怪獣が通った後の街並みのごと
立花 奏音

出窓より見ゆる柴倉山の四季をりを亡き母幾度眺めをりしか
新国由紀子

朝ドラに夢中になりて朝食もそこそこ箸を休め見入るも
渡部ヨリ子

(出詠順)

只見俳句会 三月定例会

集団就職のホーム名残り雪
期待と不安を胸に卒業す
信

白壁の倉の鍵穴寒明ける
酒蔵の煙届くや冬雲に
都

古雛や今は納戸に収まりて
春の雪光うつして屋根つたう
味代子

子等あそぶ雪山ヤマタノオロチのごと
紺碧の空映したる春の川
一 恵

若い衆の舞うステージや雪も舞い
空揚げの岩魚の旨し雪まつり
真理子

風花に霧昇り行く散歩かな
只見川鉄道写真の冬景色
睦子

日高俊平太 指導

悼 渡部幸生さん
横山嶺の上にまたたく春の星
雛軸をさげて老妻一人かな
恒 夫

折り紙の竜折り上がる年始め
降る雪や間々行き交う鳥のかけ
礼

一枚の羽毛に体春おぼろ
薄明かり尿意の我慢朝かな
一 穂

冬道を左右確認猫二匹
目を閉じて冬日の温み独り占め
修 一

